

アートの街づくり 大学・専門学校 商店などと連携 演劇で活性化／「芸術通り」運動

大学や専門学校が、芸術・文化などをキーワードに街づくりに取り組むケースが目立っている。学校が「仕掛け役」となって自治体、商店などに連携を呼びかけ、魅力ある地域に育てていこうという試みだ。



梅田のブロードウェイ化構想をテーマに意見を交わす演劇関係者ら（大阪市立大学創造都市研究科などが主催したシンポジウム＝5月30日、大阪市内で）

「大阪・梅田をアメリカのブロードウェイのような街に変えていこう」

大阪市立大学の社会人向け大学院「創造都市研究科」（GSCC）が中心となって4月に発足したグループ「創造都市キタ研究会」が、こんな構想を掲げて活動を進めている。GSCCの小長谷一之教授、宝塚造形芸術大学大学院の菅原正博デザイン経営研究科長、大阪市幹部ら約20人がメンバーに名を連ねる。

5月30日に開いたシンポジウムでは、大阪・日本橋の小劇場「インディペンデントシアター」の相内唯史プロデューサー、大阪市立芸術創造館の小原啓渡館長らが出席し、「人気が出る前の劇団の公演期間は2～3日と短く、良い作品でも、評判が広がる前に終わってしまう」「ブロードウェイのように、小規模な劇団でもロングラン公演ができるシステムが必要」などの課題が指摘された。

研究会の会長を務める塩沢由典・京都大大学院客員教授は「キタには映像、音楽、デザインなどを志す若者が集まっている。地域を含めて連携しあうことで新しい産業を育てていきたい」と話す。

今後、シンポジウムやワークショップ（講習会）などのイベントのほか、デザイン、情報技術（IT）などの分野で活躍する制作者（クリエイター）の育成、交流を後押ししていくという。

GSCCは、古美術店や画廊が並ぶ大阪市北区西天満の老松通りの商店などと連携し、「老松西天満アートストリート協議会」を結成。人通りが減る一帯を「アートの街」として再生しようという運動にも取り組んでいる。

買い物客の願い事を書いた短冊やガラス細工などで飾ったササを通りに並べる「七夕祭」を昨年7月に開催した。協議会の林秀昭会長は「先生や学生と一緒に活動すると刺激になる。昔ながらの商店街の良さを生かしながら、目新しさを打ち出したい」と意気込む。

商店街と連携したイベントに取り組んでいるのはマロニエファッションデザイン専門学校（大阪市北区）だ。ほかの服飾専門学校と一緒に、大阪・ミナミの戎橋筋商店街の一角で昨年11月、学校生によるファッションショーを催した。同商店街振興組合に呼びかけて企画、学生が商店街で販売されている商品を選んでコーディネートしたのが特色で、モデルの華やかな姿が買い物客らの注目を集めた。

振興組合の境高彦理事長は「学生の感性を街おこしにつなげたい」と話す。マロニエの野中一男校長は「マーケティングやデザインを学ぶ学生が成果を示す格好の場となる」としており、定期的に共催していく方向で検討中だ。

学校主導で進められている、これらの取り組みは、まだイベントが中心で、地域全体が盛り上がるころまでにはなっていない。地域の人たちを巻き込むなど、活動の輪を広げられるかどうかが焦点となりそうだ。

（2007年06月28日 読売新聞）